

第3節 山中式土器について

1 はじめに

大参義一氏が1968年3月に発表した「弥生式土器から土師器へ」⁽¹⁾は当山中遺跡出土土器を中心とした土器群をもって、愛知県の弥生時代後期の中に「山中期」を設定した。その瞬間から山中遺跡は弥生時代後期を代表する標式遺跡となるのである。大参氏が設定した「山中期」はその後、多くの論考を経て、伊勢湾地域における弥生後期の土器として容認されている。今回の山中遺跡の調査において、この「山中期」に所属する土器は認められたが、それらは墳丘墓からの出土に限られた。造墓時期及び主体部設営の時期決定にはさらに細かい編年が必要とされるのであり、「山中期」の再検討をかねてここでは細区分案を提示することにしたい。

基本的には大参氏が見通した編年観を踏襲するが、それにはまず基礎的な問題である標式資料の検討から始めなければならない。ところで最近の山中期をめぐる問題を整理しておくと、残念ながら大参論文からの前進はほとんど認められないのが現状といえる。それは「一括資料」が存在するにも係わらず、その提示がほとんどなされていないことに起因する。提示とは出土資料そのものへの批判であるとともにその明確な位置づけである。その様な中で山中期の細分としてはまず石黒立人氏の研究が見られる。弥生後期を3期に分け「後期2」を「山中式」に対応させる⁽²⁾。その後「山中式」に3つの変遷を想定した。それは「蕪池遺跡古相→新相、山中遺跡古相→新相」という流れであった⁽³⁾。宮腰健司氏は「山中式」を二分し、その前に「見晴台式?」⁽⁴⁾を想定する。これらの研究にはまず提示資料群自体の批判がほとんどなく、型式の分類が進んでいないため、したがって提示した資料には型式の新・古の逆転が多々見られる。それは朝日遺跡における一括資料に対する無批判の容認と、その既存の変遷観に影響されてのことであろう⁽⁵⁾。このように「山中期」は現状においても様式設定はなされていないものと判断でき、大参論文の意図は継承されてはいないようである。

ここでは「山中期」の設定基礎になった一宮地域出土の資料を基本に、その資料批判から山中式土器の設定とその細分を提示することにしたい。しかしこにおいてもやはり「資料的な不備」はつきまとわぬのであるが。

2 山中遺跡出土土器とその他の資料

山中遺跡第1次出土土器については、すでに第V章に述べておいたので、ここではそれを要約しておくこととする。

- 1、『尾張病院山中遺跡』⁽⁶⁾ 出土遺物は3回、各地点で出土しており、一括遺物とすることはできない。
- 2、出土遺物はA・B・C・Dの4地点にまとめられる。
- 3、山中遺跡B地点の出土遺物は、一括性の高いものと判断できる。

ところで、現状においても一宮地域における山中式土器の出土は、大参論文で取り上げられた遺跡

以外はほとんど認められない。そこで「蕪池遺跡」「北川田遺跡」「苗代遺跡」について、その出土状況をまとめておきたい⁽⁷⁾。

蕪池遺跡……………極めて劣悪な状況において土器の出土が確認されている。それによると 2×3 m の限られた範囲からの土器集積であったようである。掲載された資料が、全てこの集積資料であるかは問題があろうが、細かい技法、形態の分析からはやや幅をもつ資料群と考えてよからう。

北川田遺跡…………… 3×5 m の範囲からの土器集積資料である。ただしパレス壺 1 点は若干異なる地点での出土である。やや出土量が少ないので、基本器種が一応揃っているため良好な資料と考えたい。

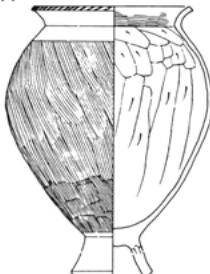
苗代遺跡第Ⅱ地点……………山中遺跡と同じ「萩原遺跡」群に所属する⁽⁸⁾。第Ⅱ地点は径 70~80cm の 2 つの「ピット」(第 1、第 2) 及び周辺の「若干の土器」からなる資料群である。厳密には 2ヶ所の遺構から構成されるもので、第Ⅱ地点の遺物を取り扱う際には考慮しなければならない点である⁽⁹⁾。

以上の遺跡の他に、特に最近では良好な一括資料の発見が報告されている。まず岩倉城下層の遺物⁽¹⁰⁾があり、また稻沢市の堀之内花ノ木遺跡の資料⁽¹¹⁾が存在する。こうした各遺跡は稻沢市、岩倉市、一宮市の濃尾平野低地部での「山中式土器」の在り方を示すものと考えることができ、そこで以下これらの資料を中心に山中式土器の細分を考えることにしたい。

3 分類

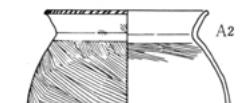
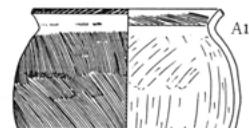
まず器種分類であるが、大きく甕を 3 類に、高杯を 4 類、器台を 2 類、鉢を 3 類、そして壺を 6 類に分類する。その特徴は下記による。

甕 A

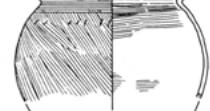
[甕 A] く字状口縁、端部に刺突文をもつ台付甕

A1 やや広口の甕。内面はタテ方向のケズリ調整が基本であり、外面はタテ方向の単斜ハケ。

A2 頸部がやや引き締まった形態をもつもの。調整はほぼ A1 に同じ。変化は体部最大径が上位から中位へ下降し、やがて球形になるという基本的な変遷が認められる。

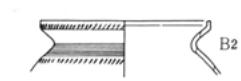


甕 B



[甕 B] 有段口縁をもつ台付甕

口縁外面に刺突文、体部上端に横線文と刺突文を施す。内外面ハケ調整を基本とする。



甕 C



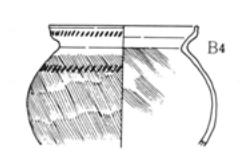
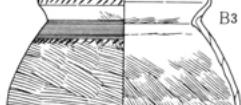
[甕 C] S 字状口縁台付甕

B1 口縁端部に明確な面をもち、外方へ突出する。

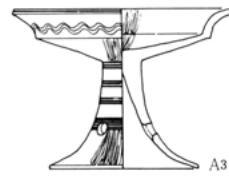
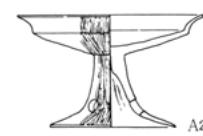
B2 大きく屈折し、直立する口縁部を有するもの。

B3 端部を跳ね上げ状にするもの。

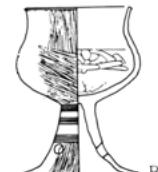
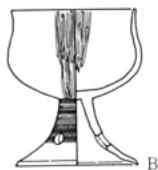
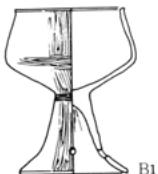
B4 内弯屈曲口縁をもつもの。廻間 I 式期に見られる。



高杯 A



高杯 B



〔高杯 A〕 有段高杯

A1 杯部上段が小さく直立するもので、ヨコミガキを基本とする。大きく外傾する中空脚をもつ。

A2 杯部上段が外彎し、タテミガキ調整を基本とする。柱状脚をもつ。

A3 加飾性が強く、杯部上段にはヨコナデ調整後、波状文等が施される。大きく外反する脚には横線文が施される。

A4 杯部上段が大きく、外傾するもの。柱状部を残して外反・内彎する脚をもつ。

A5 杯部が深く、直接大きく内彎する脚をもつ。端部には細部彎曲調整がある。廻間 I 式期に登場する。

〔高杯 B〕 ワイングラス形

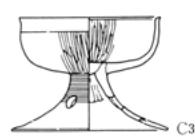
B1 杯部に屈折部をもつ。山中様式から端部に僅かな外彎をもつ。

B2 杯部が球形を呈するもの。山中様式から端部に僅かな外彎をもつ。

B3 口径と杯部最大径がほぼ同じ形状のもの。

B4 ワイングラス形高杯を代表する形式。杯部は内彎から外彎し、口縁端部に至る。

高杯 C



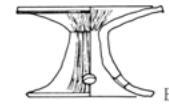
高杯 D



器台 A



器台 B



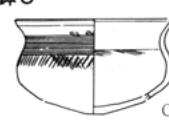
鉢 A



鉢 B



鉢 C



〔高杯 C〕 梭形高杯

C1 大きく弧状に開く杯部をもつもの。

C2 杯部口縁部がやや外反する傾向が見られるもの。

C3 口縁がやや直立傾向になり、細部彎曲調整を施す。廻間 I 式期に登場する。

〔高杯 D〕

脚部に比べ杯部が大きく楕形なもの。どちらかといえば台付鉢に近い形態。

〔器台 A〕

口縁から柱状の中空脚に至り、大きく開く裾部をもつもの。

〔器台 B〕 東海系器台

B1 大きく外反する円錐脚部をもつ。

B2 内彎脚をもつもので、廻間 I 式期をもって成立

〔鉢 A〕

口径が体部径より小さく、く字口縁、端部に刺突文を施すもの。

〔鉢 B〕 有段口縁鉢

B1 口径と体部径がほぼ同様なものの。

B2 体部径が口径を大きく凌駕するもの。

B3 口径が体部径を凌駕するもの。

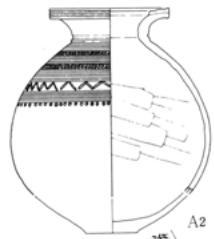
〔鉢 C〕

大きく外傾する口縁部を有するもので、有段の有無により 2 分できる。



[壺A] 加飾広口壺

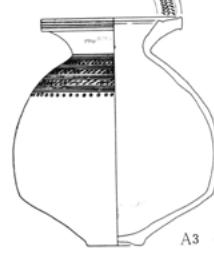
広義のパレススタイル
壺(パレス壺)は壺A
を意味する。



A1 口頸部は大きく外反し、
端部は拡張して擬凹線
をもつ

A2 口縁内面に明確な平坦
面を作るもの。

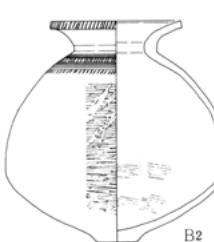
A3 体部最大径が1/4付近
に下降し、しもぶくれ
形態を呈する。口縁内
面には文様面をもつ。
廻間Ⅰ式期に成立する。



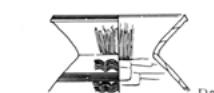
[壺B] 広口壺



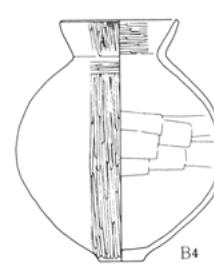
B1 長頸の外反する口縁を
もつもの。体部外面調整
はハケ調整を基本と
する。廻間Ⅰ式期から
ミガキを多用するよう
になる。また同時に山
中様式の平底から廻間
様式の突出底に変化。



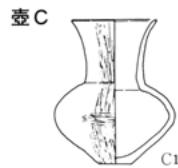
B2 短頸の外反する口縁を
有するもの。ミガキ調整、
突出底で、廻間Ⅰ式
期から登場する。



B3 直口する口縁を有する
もの。廻間Ⅰ式期から
見られる。

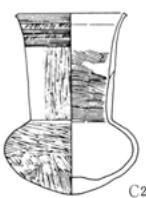


B4 内弯口縁をもつ広口壺。
ミガキ調整、突出底を
もち廻間Ⅰ式期をもつ
て成立。



[壺C] 長頸壺

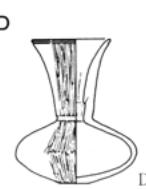
C1 外反する頸部を有する
壺。



C2 直口する頸部を有する
壺。加飾性が強い。



C3 内弯する口頸部を有す
る壺。廻間Ⅰ式期に成
立(長頸内弯壺)



[壺D] 細頸壺

D1 外反、外傾する口頸部
を有する壺。

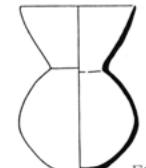


D2 内弯する口頸部を有す
る壺。尖底。廻間Ⅰ式期
に見られる。(細頸内
弯壺)



[壺E] 短頸壺

E1 外反する口頸部を有す
るもの。



E2 内弯する口頸部を有す
るもの。山中式後期か
ら認められる。(短頸
内弯壺)



[壺F]

口頸部が内傾外弯する
ものを一括する。

次に基本的な技法・形態変化の方向についてまとめておきたい。

まず山中様式を代表する高杯は、高杯A2.3であり、それは杯部の深さに変化の方向性が見出せる。すなわち口縁部径に対する杯深の比が徐々に増大し、径深比率⁽¹²⁾が15前後から40近くにまで増加する(第57図)。最終的には杯部が深く、上段が大きく外反するものに変化する。高杯の径深比率の傾向が口稜比率⁽¹³⁾に変化するのが高杯A5であり、その過程で登場する形式がA4と位置づけられよう。高杯Bの変化にもこの傾向が認められ、杯部の深さの増加が基調に存在する。その他高杯・器台にはほぼ共通する変化として、まず透孔の数が山中式中期で4から3へ統一され、後期では穿孔方法の多様化⁽¹⁴⁾が認められる。また穿孔位置が1/3以下から上昇し、1/2付近へと変化する。甕・鉢・壺は体部最大径が徐々に下降するという基本的な変化の方向が窺われる。以下形態的な属性変化を手掛りに細分する。

4 山中様式の細分

上記の変化の方向性・基調を基本に山中様式を5段階に細分し、将来の良好な一括資料の発見による様式細分に備えたい。一宮地区では山中遺跡B地点・蕪池遺跡・苗代遺跡第Ⅱ地点・北川田遺跡という変遷を基本に、堀之内花ノ木遺跡・岩倉城遺跡下層の成果を加えて考えたい。

1段階

山中遺跡B地点出土遺物を基準資料とする。その他、朝日遺跡SX194 A群⁽¹⁵⁾土器を含めることになるが、今の所、古相を考える参考資料に留まる。将来、資料の増加をもって細分が可能であろう。(0段階)

全体に加飾性に乏しく、高杯A2.3、B3.4、C、器台B、鉢B、壺A1、C1、D1、甕A2の各形式の登場を想定しておきたい。そしてこれらの形式が以下山中様式を構成する重要な型式となる。

高杯はAはA1が残存し、A2.3が新たに登場する。A2は原則的には無文のタテミガキ調整を多用するもので、A3は櫛描文による加飾性が強く、杯部上段はヨコナデ調整。A2とA3は厳密に区分でき、その系譜が異なるものである。全体に杯部の深さが浅く、上段が低い形態で、脚部は前様式が中空で直線的であるのに比べ、柱状に伸び一気に大きく開く裾部に変化する。端部は明確な面を留めない。透孔は4方向に、脚部1/3以下に穿孔される。ワイングラス形高杯Bは1~4の全ての形式が整う(B3.4は新たに出現)。その内共通する特色は、口縁端部の僅かな外彎であり、山中様式の一つの特徴と位置づけたい。形状は杯部最大径に比べ深さが浅い。脚部は高杯Aと同じ。器台はやや中空状を呈するが口縁部から大きく外反する形態である器台Bが、この段階に完成されている点は大きく評価でき、以下東海を代表する基本形態となる⁽¹⁶⁾。高杯Bと器台の脚部の形態と透孔は、高杯Aと同じであるが、端部は内傾する面をもつ。有段口縁鉢Bの登場は注目でき、体部最大径を上半におく形態をもつ。高杯Cはミガキ調整をもつ楕形高杯⁽¹⁷⁾。一方、杯部が深く脚部が小さい高杯Dは前様式から残存する。壺はA1、C1、C2、D1は山中式をもって登場する形式と考えてよいであろう。全体に体部最大径を上半におき、ミガキ調整を多用し、長頸直口壺C2以外は加飾性に乏しい。加飾広口壺A1は算盤形の体部で平底を呈し、体部の文様は櫛描文があくまで主体であるが、それに加えパレス文様Ⅰが新たに加わる可能性が高い⁽¹⁸⁾。甕は口縁端部に刺突文を施す字状口縁台付甕で、内面タテケズリ。広口のA1に加えて新たにA2が登場し、その後徐々に甕の主体を占めるようになる。

2段階

現状では明確な基準資料は見られない。大型品を除く蕪池遺跡出土土器及び山中遺跡A.C.D地点を参考にして設定する。急速に加飾性・赤彩塗布が多形式に広がる。透孔は4から3へ、そして穿孔位置の上昇傾向が見られる。端部には明確な面が見られるようになる。壺・鉢の体部最大径がほぼ中央部に下降する。以上の特色は基本的には2.3段階に共通するものといえる。(山中式中期)

高杯AはA3形式が主体を占めるようになる。端部を拡張して明確な文様面を構成するものと、面取りを行なう形態の2方向に分化する。両者とも端部に擬凹線文を施す場合が多い。杯部は直線的な形状を今だ留めるものが多い。高杯BはB1.2.3が多く散見できるが、B4は主体的な存在ではないようだ。壺A1は、はやくも体部最大径の下半への下降が開始される。但しこの現象はパレス壺に限定される。

3段階

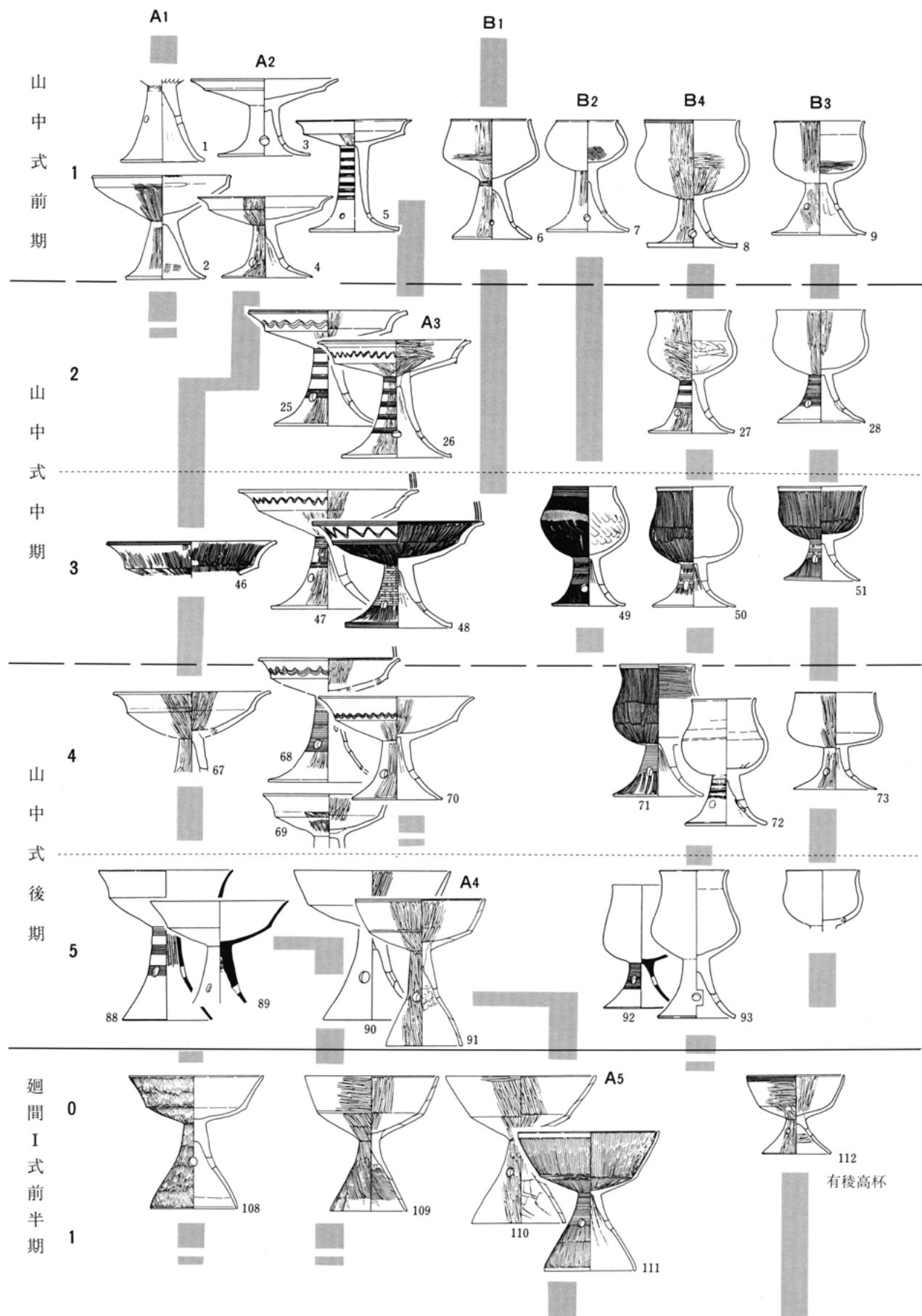
苗代遺跡第Ⅱ地点第1及び第2ピット出土土器を中心に考えることができる。また名古屋台地部では高蔵遺跡SD04もこの段階に中心をおくものであろう⁽¹⁹⁾。

高杯は、脚部が大きく外反する形態が登場し、透孔はほぼ3方向に統一され、1/3上位に穿かれることが多くなる。なお脚部の櫛描文は無文帶を構成しない連続的な施文方法も認められるようになる。高杯A3は最も加飾性が強い段階で、杯部の形態にも多様性が認められる。杯部の形状は明確に下部が内弯、上部が外弯となり、杯部上段にはヨコナデ調整のち波状文、さらにその下位に擬凹線文が施されるものが主体となる⁽²⁰⁾。杯部端部の擬凹線文は文様面を構成することがほとんど痕跡程度になる。ワイングラス形高杯BはB4形式が主体的になり、杯深を増す。器台は口縁部と脚部が明確に屈折するものから、ゆるやかに屈曲させる形態が登場する。なお、甕であるが、苗代遺跡からは受口状の口縁を有する甕が出土しているが、外面のハケ調整にヨコ方向が認められる点と、体部の横線文・刺突文が欠損していることから、この段階に所属する積極的な根拠が見られず、また他の資料群においても甕Bの山中式中期の共伴は知られていない。

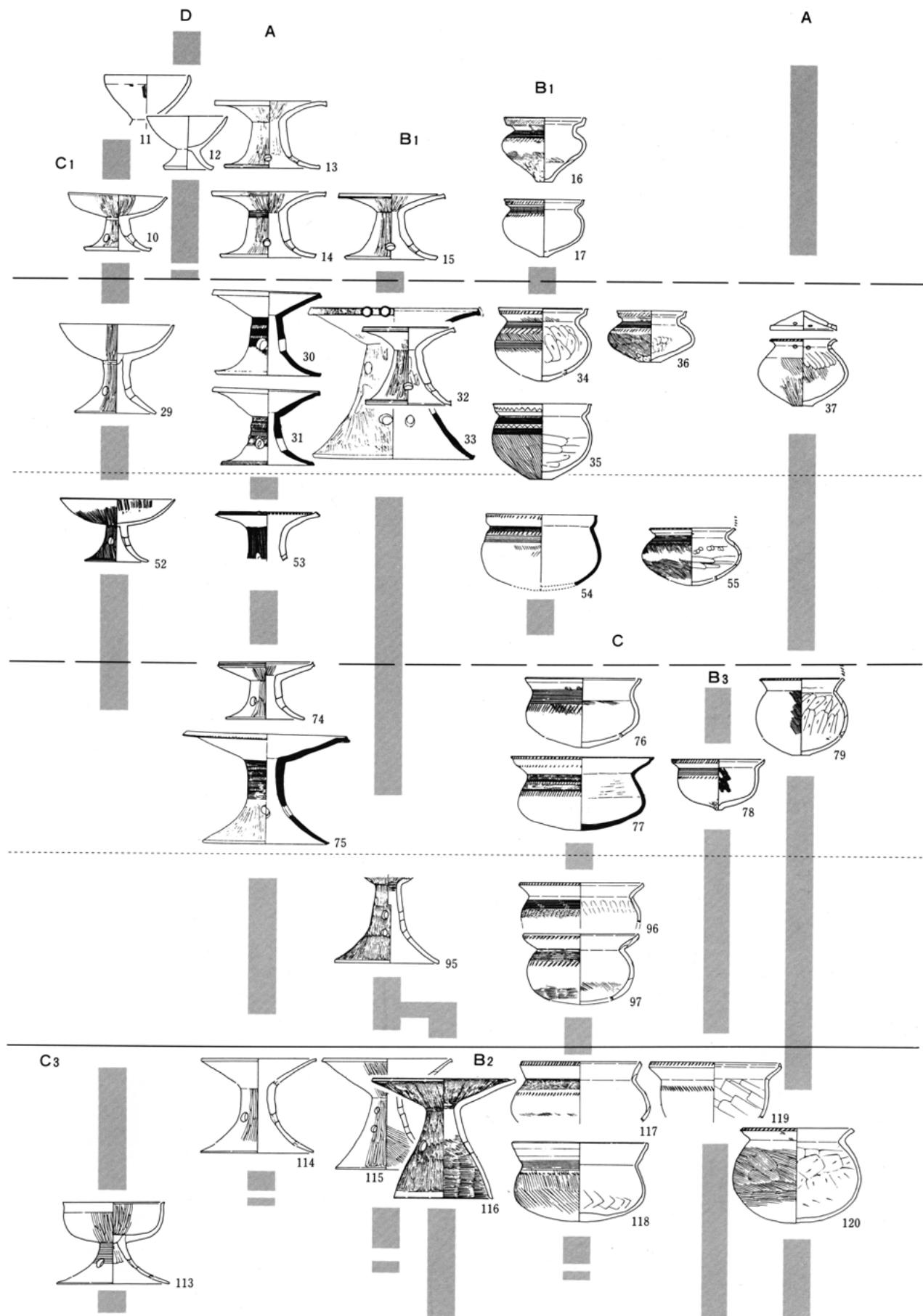
4段階

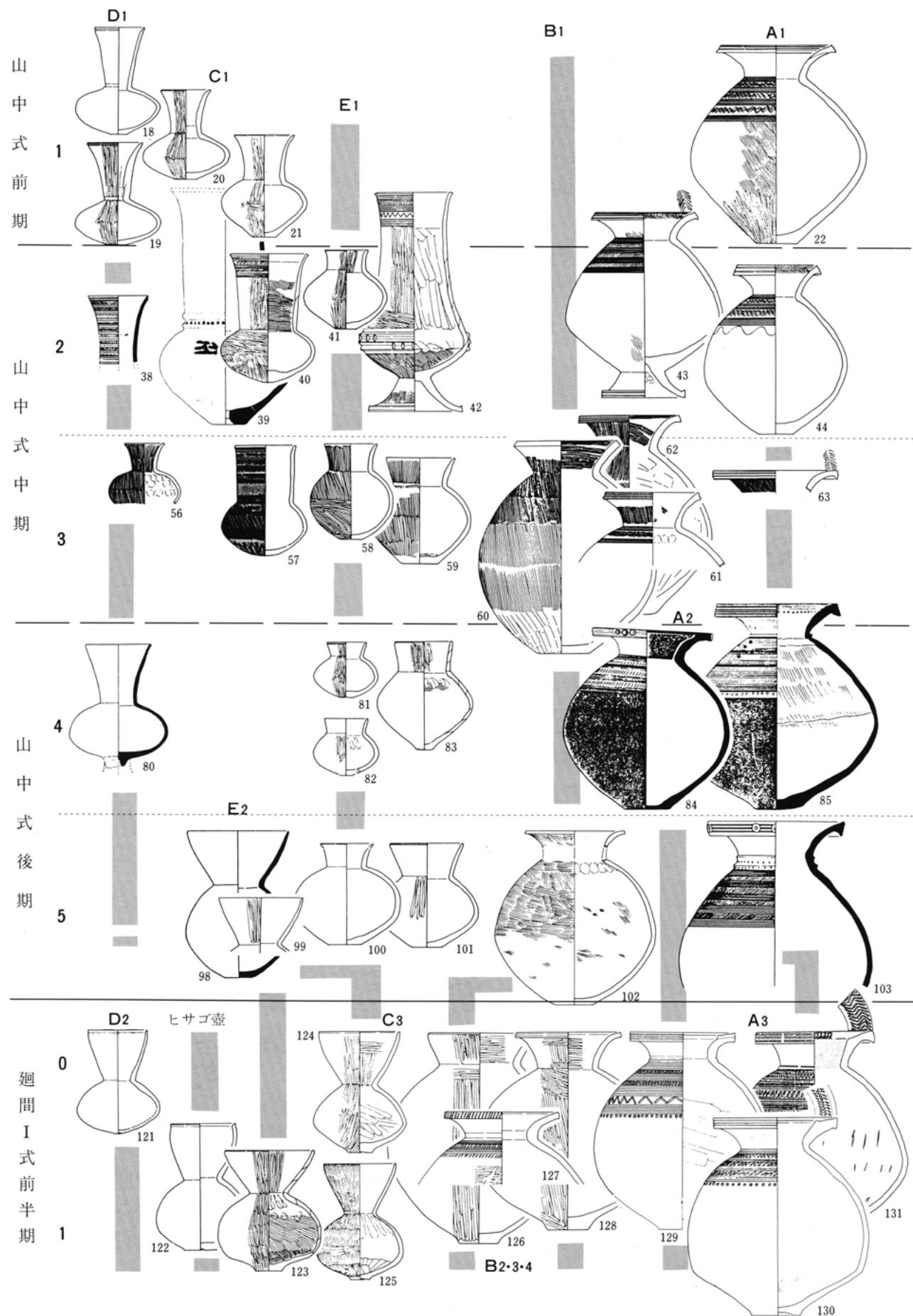
北川田遺跡・堀之内花ノ木遺跡SK50をもって設定する。新たな器種の登場が認められる。鉢B3及びC、壺A2、そして甕B2である。高杯A3は3段階で見られた加飾性がしだいに消失していく。それは杯部上段の擬凹線文がほとんど見られなくなり、波状文は上段下位に施されるものが多い。また杯部の深さが増すとともに、下段の内弯が強調され、さらに上段がより大きく外弯する。口縁端部の擬凹線も形骸化し、消失するものもある。高杯BはB3.4以外はほとんど見られず、B1.2は消失したものと思われる。高杯Cは彎曲する形態から直線的で大きく開く形態に変化するようである。鉢は、あらたに口径が体部径を凌駕するB3形式と口縁部が大きく拡張するC形式が見られるようになる。しかし体部最大径の下降は基調として認められる。底部は僅かに残存し、確実に欠損するのは廻間I式期からである。壺A1はわずかであるが底部が明確化はじめ、体部の文様に、下段列点文が加わるパレス文様Ⅱが登場する⁽²¹⁾。なお口縁端部の垂下拡張が著しくなる。口縁部に明確な平坦面を持つ壺A2が登場する。ただしA2の平坦面には基本的には文様が施されず、加飾性をもつが体部変化は他の壺と同じである。甕では明らかに甕A2が主体となり、体部中央付近に最大径をおく。外面調整においてはタテ方向に加えてあらたにヨコ方向のハケが認められるようになる。内面はケズリのほか搔壁技法も確認できる。甕Bが確実に共伴し、刺突文は大きく施される。

山中遺跡

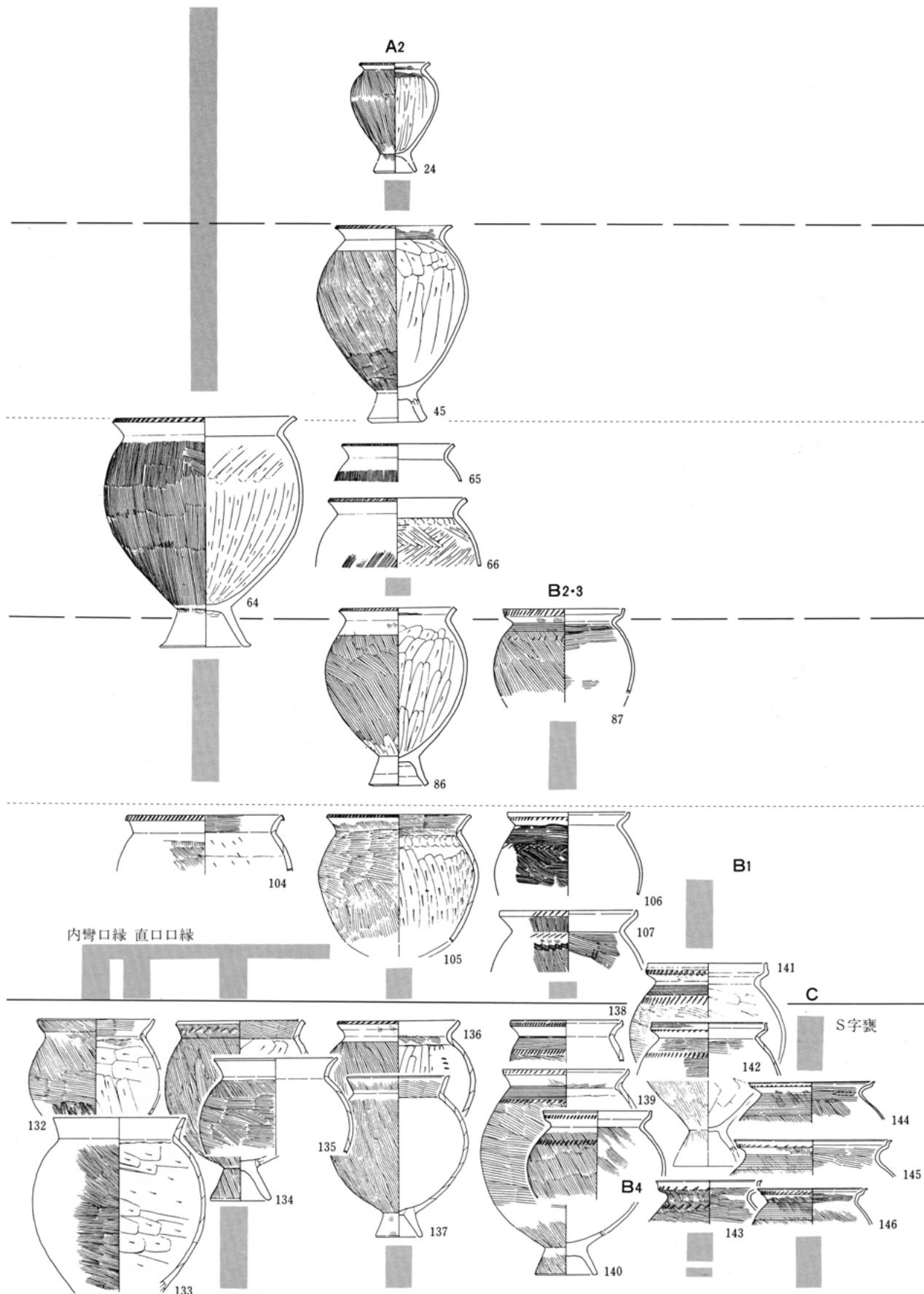


第55図 山中式土器編年表 1





第56図 山中式土器編年表 2



5 段階

岩倉城遺跡SB06、名古屋台地部では瑞穂遺跡4次SB02⁽²²⁾を中心に設定できる。また伊勢地域では西ヶ広遺跡SB21がほぼこの段階に相当しよう⁽²³⁾。

高杯A3は急速に消失し、変わってA4が主体を占めるようになる。この形態はおそらくA2の形態変化から生み出されてくるものと考えれる。それはミガキ調整も含めて、A2の脚部が、3.4段階のA3の変化に同調することなく柱状をたもつことからも想定できよう。A4は脚部が外反するものと、柱状をたもつつ内彎するものが見られる。径深比率は30となる。なお細部彎曲調整・直接大きく内彎する脚部をもつ高杯A5の登場は廻間I式期からである。因みに径深比率は40となり、その後は杯部径稜変化が基調となる。高杯B4は著しく深さが増加した形状を呈し、脚部は大きく八字状に開く。高杯は全体に端部の面取りが欠損する場合が多い。透孔は多様化し、2段構成や、互違穿孔等も見られ、穿孔位置も脚部中央位が一般化する。壺はA1以外に未だ平底を保ち、明確な定部を表面化していないのであり、突出した底部の登場は廻間I式期からである。口頸部の内彎化は基本的には短頸壺E2に限定でき、他の器種への普遍化は廻間様式をまたねばならない。壺A1は口縁端部の垂下拡張が内傾する。なお口縁内面に文様面をもち、体部最大径が1/4付近に下降した、所謂しもぶくれ形態をもつA3形式は廻間I式期の段階であり、山中式5段階での共伴例はない。甕は4段階と共に通するが、甕B2が増加する傾向が認められる。また口縁部における多様な形状や、台部の明確な内彎もこの段階では見られない。

5 山中様式について

以上の変遷による器種の消長を基本にして山中様式を設定できる。山中様式を構成する基本形式は以下の器種といえる。有段高杯A2・A3、ワイングラス形高杯である高杯B3・B4、器台A及び「東海系器台」である器台B、有段鉢B、加飾広口壺A1(パレス文様I)、長頸壺C1・C2、細頸壺D1、平底の短頸壺E1、台付甕A2。これらの器種はすでに1段階の標式資料と考えた、山中遺跡B地点に共伴しており、この段階をもって山中様式が確立していることが想定できるのである。したがってこれらの型式がほぼ同時に濃尾平野低地部において生み出されていたとすれば、その時点をもって新しい様式の誕生を考えるべきであろう。そしてその要素が現状において最も整っているものが山中遺跡である限り、その様式名称に「山中」の名を称することになんのためらいもないである。

山中様式直前段階

さて山中様式直前の土器群に関してはほとんど情報がない。直前様式から残存する形式は少なく、僅かに高杯A1・B1・D、鉢A、壺B1くらいである。その点からも高杯A1・B1のみの出現をもって「山中期」とすることは無理であろう。やはり基本構成形式のほぼ一齊の出現の意味するところの方が重要なことはいうまでもない。さて直前様式を探る唯一の手掛りは阿弥陀寺遺跡における阿弥陀寺III-3期・IV期古相とした段階の土器群の評価にかかっているといえる⁽²⁴⁾。特にIV期古相の良好な資料の発見が、研究の進展には欠かせない。なお「見晴台式?」として公表されている極僅かな土器群には、直接的に山中様式と結び付ける要素がまったくみあたらない。ただ型式が異なるものの、甕の技法・特色からは山中式中期と併行するようにも思われる。現状では山中様式前半と併行する別の土器群か。

山中様式の終焉

次に山中様式に後続する廻間Ⅰ式期との関係をまとめておこう。近年廻間Ⅰ式1段階の良好な資料が発見され、土器形式の変遷がほぼ詳細に遺構資料に基づき立証できるようになった⁽²⁵⁾。廻間Ⅰ式期をもって出現する形式としてまず有段高杯A5、椀形高杯C3、そして箱状杯部の有稜高杯がある。器台は細部彎曲調整内彎脚をもつ器台B2、直口鉢。壺では加飾広口壺A3、広口壺B2、B3、B4、長頸内彎壺C3とヒサゴ壺、細頸内彎壺D2。さらに壺においてはく字状口縁台付壺の多様な在り方、そしてS字壺。こうした廻間様式を構成する基本形式の出現とともに見逃すことができないのが技法・基調の問題である。まず有段高杯では細部彎曲調整をもつ内彎脚（杯部と直接接続する脚）の成立。杯部の変化が径深比率から径稜比率に移行する（第57図）。さて内彎志向であるが、明らかに山中式後期の段階で出現する。しかしその器種は極限定でき、高杯A4と短頸壺E2である。ところが廻間Ⅰ式期になると各種の高杯を初め器台・長頸壺・広口壺・壺の口縁・台部と様々な部位に採用され、様式全体としてのデザインの統一が計られることになる。形態の内彎志向は廻間Ⅰ式期に確立する。パレス壺A3の出現は注目でき、さらに赤彩と刺突文を組み合わせ画期的な文様である、パレス文様Ⅲの登場は興味深い。またミガキ調整を多用する壺の多様化と底部の突出は廻間Ⅰ式期の特色である。山中様式を構成した基本形式の終焉は、同時に廻間様式を構成する主要型式群の出現によってのみ実現できたのである。

山中様式2題

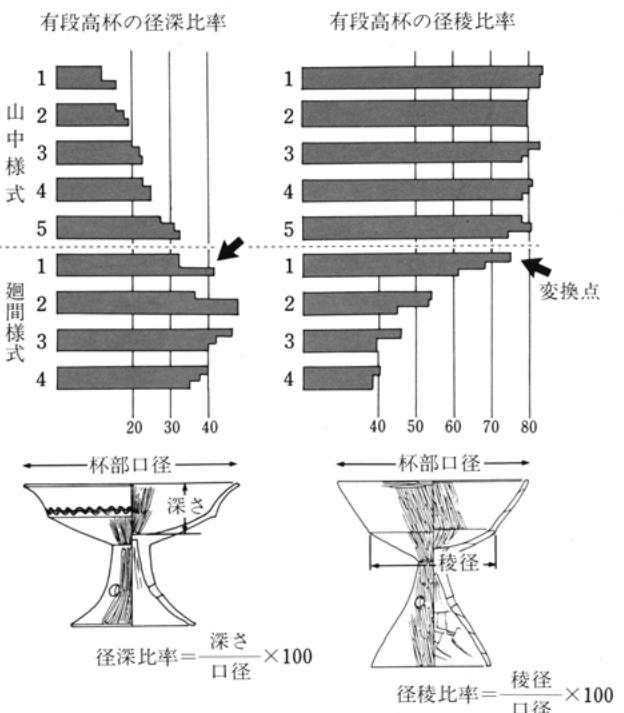
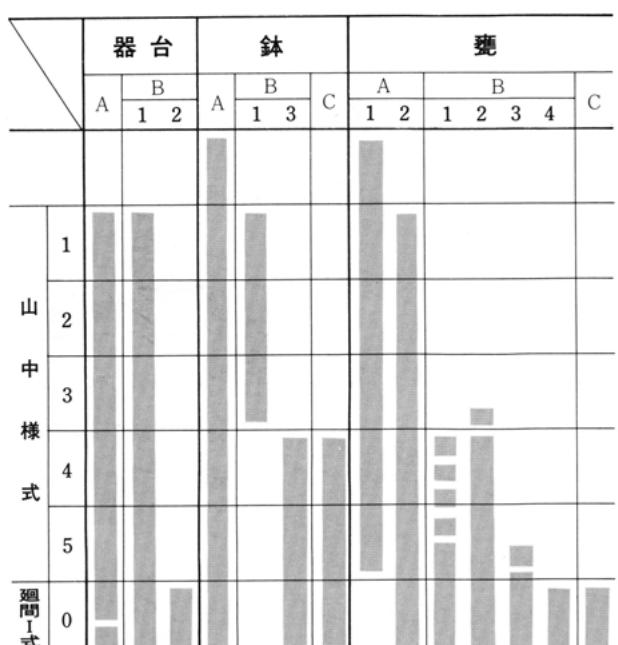
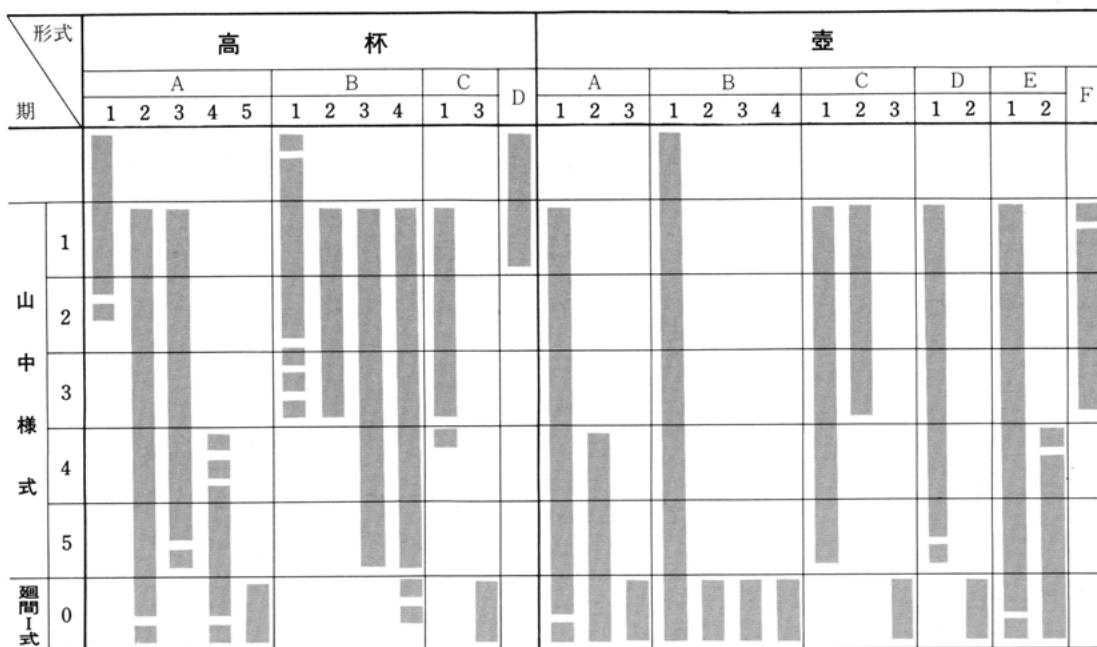
さてここで山中様式をめぐる当面の問題を2つ取り上げておきたい。一つは山中様式は通説による畿内弥生後期の土器群の影響下で成立したように理解されているが、はたしてそうであろうか。今一つは山中様式後期4.5段階の評価である。

まず山中様式成立期の土器群である1段階の形状を概観すると、どうも畿内の型式に類似するというようなものはほとんど見当たらない。高杯A3、B、鉢、壺C1、D1、Fが大和・河内の弥生後期の土器群の中に近似する資料が見当たらない。類似品を捜すとすれば、吉備地域からの影響とされる土器に行き当たる。こうした諸点を総合すると山中様式の成立には直接畿内地域を考える必要はなく、むしろ中・東部瀬戸内地域の土器様式をまずは考慮すべきであろう。ところで大阪府巨摩・爪生堂遺跡沼状遺構上層の内には山中式前期と共通する資料が認められ⁽²⁶⁾、山中様式の成立が畿内V様式初段階まで遡って考えることが可能であることを示すものである。

次に山中式後期の問題であるが、高杯A4、鉢B3、鉢C、壺A2、E2、壺B2という新たな器種が参入する。こうした山中様式を構成する基本形式の変遷の中での新たな型式の参入は、廻間様式におけるⅢ式期の状況と類似する。廻間Ⅰ式期に登場するパレス壺A3形式の成立には、どうしてもA1とA2の相乗が必要であり、高杯A5の成立においても同様にA2とA4が不可欠である。新たな形式・形態を操作する混沌とした製作環境を想定できるかもしれない。するとこうした状況は社会的に大きな変動、混乱を見するものであるように思われる。また手焙形土器の登場と小型品の増加も山中式後期にあり、それは畿内庄内様式直前段階との共鳴現象を想定できる。

（赤塚次郎）

第57図 形式の消長



編年表遺跡一覧

1段階 朝日SX194(1・2・5・6・7・11・12・23・24)
山中B地点(3・4・8・9・10・13・14・15・17~22)
山中A地点(16)

2段階 山中D地点(26・27・32・36・37・40・42・43・44・45)
蕉池(25・28・29・30・31・33・34・35・38・39・41)

3段階 苗代第Ⅱ地点(46・48~53・56・58・59・61・63~66)
高藏SD04(57・60・62)
山中(47・55)無地(54)

4段階 挖之内花ノ木SK50(67・68・76・81・87)SB54(69)
北川田(70・73・74・75・77・78・80・84・85)
朝日SX192(72・86)山中SK56(79・83)

5段階 岩倉城SB06(95~97・102・104・105)
瑞穂SB02(90・94・99・100・101・106・107)
西ヶ広SB21(88・92・103)SB23(98)SB15(89)
朝日SD178(93)廻間SB02(91)

廻間I式 岩倉城SB04(108・116・117・119・135・138)
掘之内花ノ木SB52・SX01(112・114・118・136・144)
廻間SB02(134・135・109・110)SB17(113)SB32(143)SB67(115・142)
SB75(140・145・146)SU04(133)SZ01(120・132)SB01(139)
土田(124・126・127・128・129・130・141)
岩倉城SZ01(111・125)山中SD10(123)朝日SD177(121)SD04(122)

註

- (1) 大參義一1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』X L V11
- (2) 石黒立人1987「高藏式から山中式へ」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』
- (3) 石黒立人1988「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点」『古代』86号
- (4) 宮腰健司1991「濃尾平野」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第8回東海埋蔵文化財研究会
- (5) 註4)に同じ。山中遺跡B地点土器を山中式でも新しい段階とする見方に代表される。
- (6) 吉田章一郎1960『愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡』愛知県教育委員会
- (7) 一宮市1967『新編一宮市史 資料編』2
- (8) 山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡等を含め「萩原遺跡群」として大きく一つにまとまる。
- (9) 第Ⅱ地点の遺物には廻間Ⅰ式期の土器が混入しており、資料の取り扱いには配慮が必要である。
- (10) 服部信博1991「岩倉城遺跡下層出土の遺構と遺物」『愛知県埋蔵文化財センター 年報』平成2年度
- (11) 赤塚次郎他「堀之内花ノ木遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター 年報』平成3年度
- (12) 杯部深さを口縁部径で除し、100を乗する。径深比率での数値でおおよその段階を比定できる。但し大型高杯はその限りではない。
- (13) 杯部稜径を口縁部径で除し、100を乗する。口稜比率の変化は廻間Ⅰ式0段階をもって開始される。
- (14) 2段構成の穿孔・互違穿孔・4以上の透孔を穿つ等。但し大型高杯は例外であり、穿孔方法は多様である。
- (15) SX194とした資料には山中式前期(A群)とその他の資料(B群)が混在する。『朝日遺跡』1982
- (16) 「東海系」器台と呼んでよいものである。山中様式から廻間様式にかけて存続する。
- (17) 現状では山中様式をもって出現する型式に含めて考えることができよう。
- (18) 一定の装飾が組み合わされ、特定形式に多用する文様は、パテン化され普遍化できる。パレス壺の文様は大きく2分でき、一つは櫛描文で、今一つは刺突文と横線文の組み合わせ。前者は他の広口壺等に広く使用されるため、後者を特にパレス文様としておきたい。パレス文様は4種あり、Ⅰは横線文と刺突文の組み合わせ。ⅡはⅠに下段列点文帯を加える。Ⅲは横線文と波線文を組み合わせ、さらに赤彩を波線文に加える。ⅣはⅢから下段列点文帯、時に横線文が欠損するもの。パレス文様Ⅲの成立が文様においても一つの画期であり、壺A3の形式の成立と呼応する(廻間Ⅰ式前半期)。
- (19) 重松和男他1987『高藏遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX
- (20) 杯部上段下位の擬凹線文は2段階にも見られるが、その普及は3段階の特色としてよい。
- (21) 註18)に同じ現状では山中式後期から廻間Ⅰ式前半期に散見できる。
- (22) 服部哲也1987『瑞穂遺跡第4次調査の概要』名古屋市教育委員会
- (23) 小玉道明他1970「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会
- (24) 石黒立人1990『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集
- (25) 岩倉城遺跡下層SB04(註10)・堀之内花ノ木遺跡SB52(註11)これらは廻間Ⅰ式0段階の基本資料である。なお廻間遺跡SB02はこれらの資料の発見により、この段階に主体を置くことが明らかとなった。赤塚1992「廻間Ⅰ式覚書92」『庄内式土器研究Ⅰ』
- (26) 玉井功・伊藤暁子1982『巨摩・瓜生堂遺跡』(財)大阪文化財センター
資料の実見に際し、一宮市博物館の土本典生・田中禎子両氏には多くの御配慮を賜わった。